

胃 集 団 検 診 （ 職 域 ）

動 向

平成18年度の職域における胃間接X線撮影検査の受診者数は、49,342名（対前年比105.3%）であった。昨年度より2,496名増加した。

当協会では、安全な検診を実施するために、受診前に医師が既往歴や当日の体調や血圧のチェックを行っている。さらに、バリウム事故（誤飲、極度の便秘、腸閉塞）を防止するための注意書を、受診者全員に配布し、全ての検診車には緊急時の備えとして、手動式人工呼吸器や携帯酸素を搭載している。

中央診療所や検診車のX線装置を、診断能力の高いデジタルX線への切り替えを積極的に進めている。デジタルX線の特徴は、①フィルム撮影に比べ被曝線量が少ない。②精細な画像データが得られる。③フィルムを使わず現像が不要で、撮影中にリアルタイムに画像表示ができる。④画像を見やすく加工ができ、検索も高速で行えるなどのメリットがある。

受診者の安全性を確保し、最新の装置による高精度な検診サービスの提供に努めている。

方 法

平成18年度は胃検診車、施設合わせて職域検診に10台の装置で対応してきた。撮影方法は日本消化器集団検診学会の提唱する前壁二重造影像を取り入れた撮影法で行い、造影剤も高濃度造影剤を採用し、より情報量の多い画像の提供が可能になっている。今後更に情報量の多い診断能の高いX線写真の提供に努力していく。

また、Aグループへの対応は要精密検査として直接X線検査による精密検査の方法と内視鏡検査による方法とに二分され、内視鏡検査では生検による最終診断まで可能である。

使用する装置はデジタル装置が増加し直接X線撮影の情報と同等の画質の提供が可能で、被曝においても直接撮影より軽減が可能になったことは今後の検診システムに変化が生じることも予測される。画像情報の提供はCD-Rを用いウインドーズ搭載の一般用パソコンでも充分対応可能な状態で情報が提

供できるようになった。

結 果

受診者数の動向は前年度より更に増加した。平成17年度の46,846人に対し平成18年度では49,342人と確実に増加している。男女比は例年どうり大きな変化は無い。

Aグループの受診者数は男女合わせて23,574人、要精密検査は平成16年度13.4% 17年度9.8% 18年度では6.4%まで低下している。これはデジタル装置の導入と高濃度造影剤の採用による効果と考える。精密検査を受診した人は550人で36.2%と更に低下してきた。要精密検査対象者の受診率の低下は問題で、せっかく検診を受診し異常が認められてもそのまま放置しては検診の効果が得られない。精密検査受診群から発見された胃癌は9名で要精密検査比1.6%を示す。胃ポリープ及び胃ポリポージス157人、胃潰瘍及びその癒痕は116人、十二指腸潰瘍及びその癒痕は67人、共存潰瘍及びその癒痕33人、その他の疾患は99人であった。

問題となる未受診者対策は協会では把握できない部分でもあるが、未受診となった970人については何らかの方法で受診勧奨が必要である。その第一の理由は要精密検査の550人から9名の癌が発見されていることである。今後少なくとも要精密検査の指示がでたら必ず受診してほしい。

関係の集計表は74頁に掲載